平成20年3月1日発行　明治31年4月20日　第3種郵便物認可　（毎月1回1日発行）第153巻　第12号　ISSN 0287-2706

THE RISING GENERATION

2008

3

総号1909号

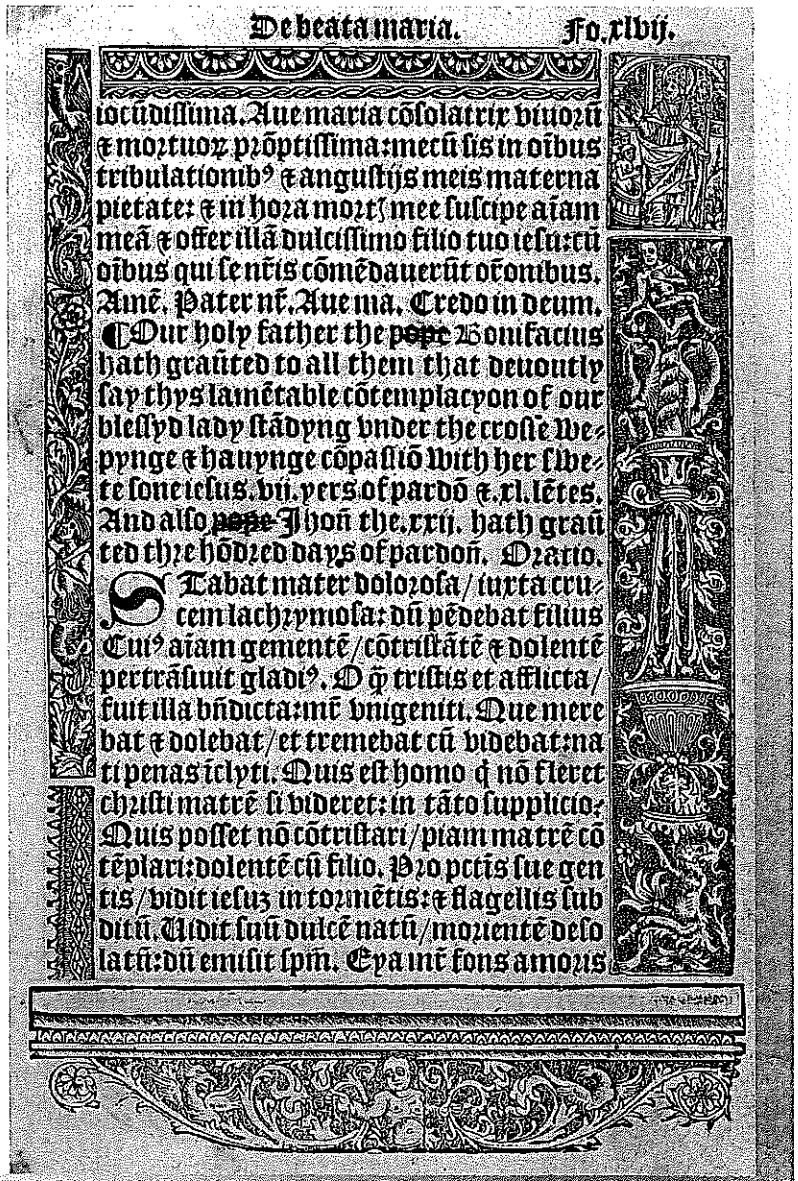
January February March April May June July August September October November December

# 英語青年

## 特集：英和辞典の新時代

特別記事：『白鯨』の風景／分裂文の時制について

連載：21世紀の洋書棚／英語史のなかの語彙拡散と収束／〈訳注式〉英語詩演習／英文解釈・和文英訳練習


De beata maria. Fo.xlvij.

iocũdissima. Aue maria cõsolatrix viuorũ
& mortuor pr̃optissima: mecũ sis in oibus
tribulationib⁹ & angustijs meis materna
pietate: & in hora mortis mee suscipe aiam
meã & offer illã dulcissimo filio tuo iesu: cũ
oibus qui se nris cõmẽdauerũt oronibus.
Amẽ. Pater nr̃. Aue ma. Credo in deum.
¶ Our holy father the pope Bonifacius
hath graũted to all them that deuoutly
say thys lamẽtable cõtemplacyon of our
blessyd lady stãdyng vnder the crosse We-
pynge & hauynge cõpassiõ with her swe-
te sone iesus. vij. yers of pardõ & .xl. lẽtes.
And also pope Jhoñ the. xxij. hath graũ
ted thre hõdred days of pardoñ. Oratio.
Stabat mater dolorosa / iuxta cru-
cem lachrymosa: dũ pẽdebat filius
Cui⁹ aiam gementẽ / cõtristãtẽ & dolentẽ
pertrãsiuit gladi⁹. O q̃ tristis et afflicta /
fuit illa bñdicta: mr̃ vnigeniti. Que mere
bat & dolebat / et tremebat cũ videbat: na
ti penas iclyti. Quis est homo q̃ nõ fleret
christi matrẽ si videret: in tãto supplicio?
Quis posset nõ cõtristari / piam matrẽ cõ
tẽplari: dolentẽ cũ filio. Pro pctis sue gen
tis / vidit iesus in tormẽtis: & flagellis sub
ditũ. Vidit suũ dulcẽ natũ / morientẽ deso
latũ: dũ emisit spm̃. Eya mr̃ fons amoris

KENKYUSHA

# 英語青年

THE RISING GENERATION

第153巻 / 第12号 (総号1909号)

平成20年3月1日発行　明治31年4月創刊


## 目　次

### 特集　英和辞典の新時代


意味への回帰……瀬戸　賢一　714

'Natural English' とは何か……池上　嘉彦　718

辞書編纂におけるコーパス利用……赤野　一郎　722

学習を支援するデバイスとしての英和辞典……田中　茂範　724

理想の英和辞典を求めて……南出　康世　727

英和辞典の過去・現在・未来……八木　克正　729

一般英和辞典に求められるもの……馬場　彰　732

電子メディア 対 従来型辞書……投野由紀夫　735


### ● 特別記事


『白鯨』の風景……西谷　拓哉　740

分裂文の時制について……安井　稔　756


### ● 連　載


〈訳注式〉英語詩演習 (72 [最終回]): Lord Byron, ['The Dying Gladiator'] from *Childe Harold's Pilgrimage*, IV——廃墟のなかの廃残の身……笠原　順路　738

21世紀の洋書棚

Alasdair Gray, *Old Men in Love*——恋する老人は学び続けるか……高橋　和久　745

Deidre David ed., *The Cambridge Companion to the Victorian Novel*——ディケンズを誤読する「必携」……佐々木　徹　748

英語史のなかの語彙拡散と収束 (12 [最終回]): 受動進行形の動詞の拡散、能受動進行形の動詞の収束……中村不二夫　758


### ● 海外新潮


Wilcox 版 George Herbert 詩集……西川　健誠　751

蘇るヴァージニア・ウルフ……片山　亜紀　751

Ní Dhomhnaill, Patterson and Transnational Storytellers……池田　寛子　752

「アメリカ」文学教育の行方……中垣恒太郎　753

Dialogue through the Clay……室　淳子　754

オーストラリア詩の現在にアクセスする……湊　圭史　754


### ● Book Review

新刊書架


相沢佳子著『850語に魅せられた天才 C. K. オグデン』(尾崎俊介)——山梨正明編 / 上原聡・熊代文子著『音韻・形態のメカニズム——認知音韻・形態論のアプローチ』(「講座 認知言語学のフロンティア」1) (吉村公宏)——Chiaki Hanabusa (英知明) 編: *The Famous Victories of Henry the Fifth 1598* (The Malone Society Reprints, Vol. 171)』(山田昭廣)——小林かおり著『じゃじゃ馬たちの文化史——シェイクスピア上演と女の表象』(森祐希子)……762

英文解釈練習……行方　昭夫　766

和文英訳練習……上田明子 / Thomas F. Mader　768

EIGO CLUB……771

片々録……772

CORNERS……774

表紙について: 中世ヨーロッパの書物 (12 [完])……松田隆美　755

『聖母マリアの時禱書』(パリ、1526年)。慶應義塾図書館蔵。装丁: 広瀬亮平。

次号予告……737

# Lord Byron, ['The Dying Gladiator'] from *Childe Harold's Pilgrimage*, IV

## ——廃墟のなかの廃残の身——

笠 原 順 路

### [The Dying Gladiator]

**140.**

I see before me the Gladiator lie:
He leans upon his hand—his manly brow
Consents to death, but conquers agony,
And his drooped head sinks gradually low—
And through his side the last drops, ebbing slow
From the red gash, fall heavy, one by one,
Like the first of a thunder-shower; and now
The arena swims around him—he is gone,
Ere ceased the inhuman shout which hail'd the wretch who won.

**141.**

He heard it, but he heeded not—his eyes
Were with his heart, and that was far away;
He reck'd not of the life he lost nor prize,
But where his rude hut by the Danube lay
*There* were his young barbarians all at play,
*There* was their Dacian mother—he, their sire,
Butcher'd to make a Roman holiday—
All this rush'd with his blood—Shall he expire
And unavenged? — Arise! ye Goths, and glut your ire!

### [剣闘士の最期]

**140.**

眼前に剣闘士が見える。
手で体を支え、死に同意した男の顔は、
苦痛をこらえている。
うな垂れた頭が徐々に沈み、
脇腹の赤い裂目からは、最後の重い滴りが、
吸い込まれるように、一滴また一滴と落ちる。
ちょうど、雷雨のさきぶれとなる最初の滴のようにして。今や
闘技場が剣闘士の周囲で回っている——もう逝っている、
みじめな勝者を讃える無慈悲な歓声も静まらぬうちに。

**141.**

耳にはそれが聞こえた。が、心には届かなかった。目はすでに遠く、心とともにあったのだ。
どうでもよかった、自分が命を失おうと、敗者の命を手にしようと。
それよりも、ドナウ河のほとり、故郷の賤が伏屋のあたり、
そこに、遊び戯れる我が子らと、
そのダキア人の母親がいた。その父親の自分が
屠殺され、ローマ人の楽しみに供されている時に。
これらのこと全てが、血が迸り出るのと同時に、脳裏を走った。この男を息絶えさせておいてよいのか、
しかも、復讐もされぬままに。立て、汝らゴート人よ、怒りをはらすのだ。

【語 釈】

**nor prize:** nor of the life he prize. 自分が勝てば、対戦相手の命を我がものにできるので、こう言う。prize は仮定法。(lost は、今死にかけているので直接法。)

**But where . . . their Dacian mother:** 剣闘士が最期の瞬間に心の目で見た妻子の姿。

**Dacia:** ドナウ河の北、ローマ帝国辺境の地。Byron は、ダキア人を、ローマ人のあと3世紀からこの地を支配したゴート人と混同している。

【鑑 賞】

*Childe Harold's Pilgrimage* (以下 *CHP*) とは、作者 Byron (以下 B) 個人の影を背負った貴族の御曹司 (= childe) を主人公とする旅行記で、人生の快楽を嘗めつくした憂鬱の青年ハロルドが、欧州各地を巡りながら、その土地の歴史や風物などに接してさまざまな感想を述べる、というのが作品の骨格である。ポルトガル・スペイン・アルバニア・ギリシアなどの実際の B の旅に取材した第1・2巻が1812年に出版され、ある朝目覚めたら有名になっていたという言葉を吐いたと言われるほど、B の名が広まる。時まさに、摂政皇太子の御世である。彗星のごとく登場した、デカダンを衒ったこのダンディ詩人の周りには、社交界の女性たちが、既婚、未婚を問わず、ある者はまじめな交際を求めて、ある者はアヴァンチュールを求めて群がって来る。1815年、これまで付き合ってきた女性たちとは正反対の Annabella Milbanke と結婚するが、結婚後も腹違いの姉 Augusta との関係が断ち切れず、また B 自身の特異な性格もあって翌年、一女の母となった妻から離別を迫られることになる。一転して冷たくなった社交界から近親相姦の非難を浴び、追われるようにして英国を去り、大陸へ向かう。1816年に出た *CHP* 第3巻も、大陸での B とほぼ

同じ軌跡をたどる。つまりナポレオンが、英国とプロイセンの連合軍に大敗を喫して1年と経たないワーテルローの戦場跡から、ライン川を遡りレマン湖に至る旅がもとになっている。また、1818年出版の最終第4巻も、主にヴェネチアとローマを扱ったもので、イタリアでのBの見聞に基づいている。

引用は、古代ローマで、猛獣と人間や、剣闘士同士の殺し合いなどが、ローマ市民の娯楽として供せられていたコロセウムの場面(所謂「コロセウム・エピソード」は128～145連)である。128連、月光に照らされた闘技場に立つ語り手は、コロセウムを廃墟たらしめた《時》を讃美し、「嗚呼、《時》よ、死者を美化するものにして、廃墟を飾るものよ。/血を流した心を慰め/癒してくれるただ一つのもの」と呼びかける。こう始まった《時》への呼びかけは、しかしながら、徐々にその《時》によって慰められている語り手自身の方に意識が向いていく――「《時》よ、誤った判断を正し、/真実と愛を試すもの」(130連) このあたりから、B個人の私事を暗示しているとしか思えない詩行が続く。復讐者としての時に呼びかけながらも、廃墟に立つ自分を、《時》の神殿に捧げられた供物としての「長の年月を経てきた、崩れかけた身」(131連) と表現するなどして、常に自分自身を意識する表現を挟み込みながら、60行以上に亘ってBの私憤(と思われる激情)が吐露される。例えば、'Have I not suffered things to be forgiven? / Have I not had my . . . / Hopes sapp'd, name blighted, Life's life lied away?' (st. 135) などは、離婚時における、Bと、アナベラおよび、その一族らとの争議のさま、いや争議がBに与えた心的影響を物語っている。とりわけ '[to have my] Life's life lied away' は、詩人がアナベラに産ませた実子 Ada を「偽り盗られた」と考えているB個人の心情であろう。そもそも *CHP* の読者層は、Bを中心として、複数の同心円を形成している。より中心に近いウィッグ系貴族の社交界を形成する数十名の読者がこうした詩行を読めば、照応する事実がかなり明確に浮かび上がってくるだろうし、必ずしもBの醜聞に明るくない円周部に位置する多数の読者が読めば、時代の寵児の内奥の苦しみを覗き見する喜びを味わうことができる。現在の決定版B全集の編者 McGann は、この130～138連を「最も赤裸々な自伝的詩行」と述べている。大いなる《時》を前にして、自我が縮小するどころか拡大、いや肥大化しているのだ。

しかしひとたび自我を肥大化させて私事を吐き出してしまうと、次には自我が縮小を始める。その境目となるのが、138連だ。冒頭の 'The seal is set' という句は、「自我意識の噴出に封をした」という意にとりたい。そこで語り手は、「恐怖とは全く異なった深い畏怖の念」を感じて、自分がコロセウムに同化して他からは見られずに、そこで起こった全てを見る(. . . we become a part of what has been, / And grow unto the spot, all-seeing but unseen)。こうして、139連から、幾万の観衆の歓声で沸き返る在りし日のコロセウムの描写となる。コロセウムで最期を迎える剣闘士の運命に関するB流の moral reflection である――「死ぬ場所がどこであろうと、それが何だ。戦場でも、/闘技場でも、蛆虫の腹に納まるのに代わりはない。/どちらも、劇場。主役は舞台で腐ってゆく役者」シェイクスピアを引くまでもなく、人生は劇場で我々は舞台上の役者である、という陳腐なまでに常套的なモラルも、Bの詩の語り手から発せられると、これが剣闘士や奴隷や兵士だけではなく、人間全てにも当てはまる、そして(次のところがすこぶるB的なのだが)人間全てに当てはまるのなら当然Bの実人生にも当てはまる、という意味を帯びてくる。

引用した140連では、gradually . . . slow . . . one by one などの語句も手伝って、血が一滴一滴と垂れる様が、まるでスローモーション画像のようにはっきりと描かれ(モデルとなったローマのカンピドリオ博物館蔵の「瀕死のガリア人」[63頁参照] でも血の滴が鮮明に見える)、そして141連では死にかけている剣闘士の脳髄の内部にまで語り手の目が入り込み、剣闘士が最期に心の目で見たドナウ河のほとりで遊び戯れる妻子が示される。しかしそうした感傷的な場面を吹っ切るかのようにして次の一文がくる――'All this rush'd with his blood'. この rush という語で、叙述のスピードが元に戻る。最後に、意志未来 Shall he. . . によって、これまで姿を隠していた語り手が前面に現われ、コメントを述べる――「この男を息絶えさせておいてよいのか/しかも、復讐もされぬままに。立て、汝らゴート人よ、怒りをはらすのだ」と。

妻子から引き離され、異郷の地で息絶えてゆくこの剣闘士は、一見語り手の自我意識の影響を受けていないようだが、その実128～137連で暗示されていたBの私事の修辞的残像を免れることはできず、というより、その修辞的残像の上に計算して置かれていて、そのため、これは、離婚した妻およびその一族から責め立てられ、そのうえ社交界から追われ傷ついたB自身の姿と重なってくるのである。第4巻の別の箇所で語り手は、イタリアの景物に接して感懐を述べている自分を「廃墟のなかの廃残の身 (A ruin amidst ruins)」(219) と表現しているが、コロセウムという廃墟のなかに、息絶えていく剣闘士を置き、それを、詩人の自画像と重ね合わせているこの「剣闘士の最期」もやはり、廃墟のなかに置かれた廃残の身を描いたものと言えよう。

141連最終行、古代ローマ人が犯した制度化された蛮行に対する語り手の公人としての憤りは、かくして叙事詩的規模に拡大したBの私人としての憤りと二重映しになる。そのローマ帝国も、しかしながら、後にゴート人らの「蛮族」の侵入によって没落したという歴史的事実を考えると、「立て . . . ゴート人よ」という公憤の正当性を後の歴史が証明することになったのと同様に、Bの私憤の正当性も後の歴史が証明することになる、とBは主張したかったに違いない。

(明星大学教授)

188 頁、2,600 円、英宝社。

『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化（生誕百五十年記念）』松岡光治編、2007 年 11 月、A5 判 556 頁、8,000 円、溪水社。

『講義　アメリカ文学史（I・II・III）——東京大学文学部英文科講義録』[全 3 巻] 渡辺利雄著、2007 年 12 月、A5 判 (I) xiv＋458 頁、(II) xxiv＋492 頁、(III) xxiv＋478 頁、各 6,800 円、研究社。

『エコトピアと環境正義の文学——日米より展望する広島からユッカマウンテンへ』スコット・スロヴィック、伊藤詔子、吉田美津、横田由理編著、2008 年 1 月、A5 判 viii＋364 頁、4,500 円、晃洋書房。

『ヘミングウェイとスペイン内戦の記憶——もうひとつの作家像』船山良一著、2007 年 11 月、A5 判 356 頁、3,500 円、彩流社。

『シルヴィア・プラス　愛と名声の神話』高市順一郎編著、2007 年 9 月、A5 判 262 頁、2,800 円、思潮社。

『フォークナー事典』日本ウィリアム・フォークナー協会編、2008 年 1 月、A5 判 x＋846 頁、12,000 円、松柏社。

『知の版図——知識の枠組みと英米文学』鷲津浩子・宮本陽一郎編著、2007 年 11 月、四六判 344 頁、2,800 円、悠書館。

『英語教師のスクラップ・ブック』田口孝夫著、2007 年 12 月、四六判 272 頁、非売品、悠書館。

〈英語学・英語教育〉

『実践　英文快読術』（「岩波現代文庫　文芸」129）行方昭夫著、2007 年 12 月、文庫判 x＋324 頁、1,000 円、岩波書店。

『英語語法文法研究　第 14 号』英語語法文法学会編、2007 年 12 月、A5 判 166 頁、3,800 円、開拓社。

『謎解きの英文法　否定』久野暲・高見健一著、2007 年 12 月、四六判 viii＋206 頁、1,500 円、くろしお出版。

『日本語類義表現使い分け辞典』泉原省二著、2007 年 12 月、A5 判 xl＋1186 頁、5,400 円、研究社。

『アイルランド語文法　コシュ・アーリゲ方言』ミホール・オシール著、京都アイルランド語研究会編訳、梨本邦直責任編集、荒木孝子・池田寛子・岡村眞紀子・谷川冬二・中村千衛・春木孝子・疋田隆康・菱川英一・福本ひろ・増田弘果訳、2008 年 1 月、B5 判 xvi＋394 頁＋CD、5,400 円、研究社。

『「達人」の英語学習法——データが語る効果的な外国語習得法とは』竹内理著、2007 年 11 月、四六判 166 頁、1,500 円、草思社。

『英語上達法——文法から総合力へ』中田康行著、2007 年 5 月、A5 判 viii＋152 頁、1,800 円、大学教育出版。

『レトリックのすすめ』野内良三著、2007 年 12 月、四六判 xviii＋222 頁、1,500 円、大修館書店。

***The Proceedings of the Eighth Tokyo Conference on Psycholinguistics***, Yukio Otsu（大津由紀雄）編、2007 年 11 月、菊判 iv＋332 頁、9,800 円、ひつじ書房。

〈翻訳（文芸作品のみ）〉

『シェリー詩集［改版］』（「新潮文庫」シ-11-1）上田和夫訳、2007 年 12 月（初版 1980 年 9 月）、文庫判 338 頁、514 円、新潮社。

---

● 編集後記　小誌の編集を今月号をもって離れることになりました。筆者が小誌を引き継いだのは 2001 年 4 月号からで、そのときの特集号は「英語学のこれから」。フィロロジー系の方からは、その特集は英語学ではなく言語学の特集にすぎない、キミにはまったく失望したという批判を頂戴したのを思い出しますが、小誌が「英語」青年であり続けることの難しさはこの最初の号から痛感することになりました。そのうえ、筆者の個人的な趣味もあって、当初のもくろみよりははるかに、「英語」青年であるよりは、「英文学」青年ふうになっていたことも否めません。▲　なにができて、なにができなかったかは、試行錯誤の末に出来上がった 7 年分の雑誌を見ていただいて判断していただくほかありません。いまはただ、記事のひとつひとつに感想を送ってくださった方々、苦境を察して「定期購読することにしたよ」と言ってくださった方々（その具体的な行動にどれだけ励まされたことか!）など、小誌を見守ってくださった方々に深く御礼申し上げます。ここではお一人だけ、先日亡くなられた平野敬一先生のことについて触れておきます。筆まめだった平野先生からはずいぶんとお手紙を頂戴しました。「『英語青年』の、誰それの記事の日本語は、日本語ではないので、著者にどんどん注文をつけるように」というコメントもしばしば頂戴しましたが、しかしその一方で、病床にあっても唯一楽しみにしているのが『英語青年』であると書き送ってくださったのも平野先生でした。忘れられないのは、ビルマ戦線で壮絶な体験をされた萩原文彦先生が亡くなったあと、同じくビルマで苦労された小西友七先生（もう晩年に近かった頃です）から頂戴したお手紙を Eigo Club に掲載したさい、平野先生から、よくぞ掲載してくださった、というお手紙を頂戴したことです。「生と死の真実に触れてくるような、そんな文章が少なくなったと思っていただけに、小西氏の文章は衝撃的であった」と書かれていました。▲　来月号からは新編集長による号になります。どうかこれまでと同様のご愛顧を賜りますようお願い致します。▲　蛇足。で、編集していて 7 年の間で何がいちばん楽しい号だったかというと、それは「苦手な作家」特集です。


英　語　青　年

3　月　号

第 153 巻　第 12 号

平成 20 年 3 月 1 日発行

定価 1200 円 本体 1143 円

（送料 84 円）

編集人　津　田　正

発行人　関　戸　雅　男

印刷所　研究社印刷株式会社

発行所　株式会社　研究社

〒102-8152 東京都千代田区富士見 2-11-3

電話：03-3288-7740（編集）　03-3288-7777（営業）

Fax：03-3288-7832（編集）　振替 00150-9-26710

E-mail: seinen@kenkyusha.co.jp


© 株式会社　研究社　2008